

同志社 クローズ・ アップ

ハリス理化学館同志社ギャラリー 開館経緯について

同志社社史資料センター

開館

2013年11月29日の創立記念日、ハリス理化学館同志社ギャラリーが開館した。オープニング・セレモニーでは、村田晃嗣大学長の式辞、大谷實総長の祝辞のあと、福島県、京都府、会津若松市、京都市の来賓から挨拶を賜わり、水谷誠理事長の祝辞をもって終了した。その後、内覧会を経て13時にオープンした。

ギャラリーは今出川キャンパスのちょうど中央に位置するハリス理化学館（国の重要文化財）内に設けられた。館内には6部屋の常設展示室（「新島襄の人と思想」、「同志社のあゆみ」、「同志社の今」、「世界の中の同志社」、「J・N・ハリスと同志社」、「京都の中の同志社」と2部屋の企画展示室が設けられ、同志社の歴史や文化を総合的に展観できる施設となっている。2013年12月末日で、入館者数は1万人を越え、学内外を問わず多くの方々が来場されている。

経緯

そもそも、ギャラリーの設置経緯はさかのぼること4年前のハリス理化学館構想検討委員会の設置が契機である。当時、まだ今出川キャンパス整備事業が継続しており、新しいキャンパス構想では、ハリス理化学館（以下、理化学館）にあった各事務所が別の建物に移転し、理化学館そのものをどのように運営していくかが課題となっていた。そこで、理化学館全体を展示室とし、どのような構成で運用するかが検討されたのが構想検討委員会であった。

委員会では多種多様な意見が出された。そして、1年に及ぶ議論を経て、さらに1年後の2011年3月31日付で「ハリス理化学館の構想について」（答申）が提示された。この答申に理化学館が担うべき役割が明記されている。理化学館は「建学の精神と教育の理念への理解を深めることを目的」として、（1）常設・企画の展示（2）新入生初年次教育や留学生オリエンテーションとの連携（3）新入社員（教職員）研修との連携（4）法人内諸学校における正課・課外活動との連携（5）講習会・

研究会の開催などがあげられている。つまり、構想検討委員会の出した最終的な結論は、理化学館の教育利用、さらには自校史教育のための活用が大前提である。

この答申を受けて、同年11月ハリス理化学館新島記念ギャラリー設置検討委員会が組織され、8カ月の議論を経て、より具体的検討を行うハリス理化学館同志社記念ギャラリー設置準備委員会、そして、その具体案を作成する作業部会が設置された。以来、2年の歳月をかけ、構想検討委員会の答申をふまえて議論を重ねられ、この度の開館となった。

以上の経緯からも伺えるように、ギャラリーの大前提は教育利用、すなわち大学をはじめとする同志社内諸学校の児童・生徒・学生、教職員、さらには卒業生らが母校への理解を深め、愛校心を育むことが第一の目的である。加えて、新しく同志社から内外に対して情報を発信する情報発信基地としての役割を課せられた。すなわち、ギャラリーは、同志社の伝統と革新を伝播するという役割を担うことになった。

「活きた」ギャラリーに

ただし、ギャラリーを活きた建物とするには、常設展示室および企画展示室が「動き」や「斬新さ」を感じる場所として運営する必要がある。そこで、常設展示室は年に6回の展示替え、企画展示室については年に数回の企画展を実施することが検討された。とりわけ、企画展示室については、運営主体である当センターや歴史資料館のみならず、広く教職員の研究成果など、さらには外部からの持ち込み企画も考慮し、「社会貢献・社会

的発信」を意識した企画展を展開する予定である。大学として様々なテーマをどのようにアカデミックに発信していくかが今後の課題となる。

また、ギャラリーの中にハードとソフトは揃ったが、これらを活用する人物の存在が不可欠である。従来、当センターと歴史資料館が保管している資料が年間を通して多くの方々にご覧いただくことができる環境は十分に備わっていたとはいえなかった。ギャラリーを多くの同志社関係者が言葉で語ってきた伝統や歴史を紡ぐ場として捉え、共に同志社の歴史に係わる一人として来館していただけることを強く願う。



第1回企画展「新島襄と八重」



1階常設展示室「美術部クラマ画会創部100周年記念展」

同志社 クローズ・アップ

文化財を地域で活かす —大坂城残石切丁場天狗岩丁場の魅力を後世に—

NPO法人人文社会調査研究
支援機構(SOCRAH)

ふくはらけいすけ
福原啓介

1. はじめに

NPO法人人文社会調査研究支援機構(英名: Social Organization for Creating Advanced Humanities)(以下SOCRAH)は同志社大学文化遺産研究センターのメンバーが主幹となり構成されている法人である。筆者を含め、所属メンバーは同志社大学文化情報学部卒業生や大学院に在学している学生が多く、大学で学んだ社会調査の手法や、統計的手法を駆使しながら、地域文化や文化財を活用し、多活性化を目指した事業を行うことを目的として活動している。大学発の知を社会化する役割を大学とは別の論理で協力し合いながら推進することが基軸理念である。

2. 小豆島東海岸文化ツーリズムで広げる「地域の知」

小豆島東海岸文化ツーリズムは、小豆島町と同志社大学文化遺産情報科学研究センターが目指す「東瀬戸内文化圏」の世界遺産化プロジェクトの一環として、小豆島町東瀬戸内文化圏「世

界遺産化」対策室、福田地区連合会、小豆島福田の魅力発見隊!あきやきやクラブなどの協力のもと、SOCRAHが企画・運営及び社会調査を行った。開催は瀬戸内国際芸術祭2013の会期に合わせて2013年7月27日(土)〜9月1日(日)と10月5日(土)〜11月4日(月)の土日祝日に行い、福田地区にある「福武ハウス」から安田地区の「つぎつききんつき」をマイクロバスで1日6便運航し、途中の天狗岩丁場を30分ガイド付きで探訪してもらうという企画である。

本企画には二つの目的がある。一つは観光客に対して文化財をアピールし、小豆島の魅力を発信することである。夏会期と秋会期の2時期で延べ723人のツアー参加者があり、マイクロバス利用者が266人で自家用車利用者が457人であった。会期が2時期にそれぞれ10日間であったにもかかわらず、多くのツアー参加者があり、天狗岩丁場の魅力を十分に発信できたと思われる。また、マイクロバス利用者に対してはアンケートを取り、今回の企画についての満足度の調査を行った。

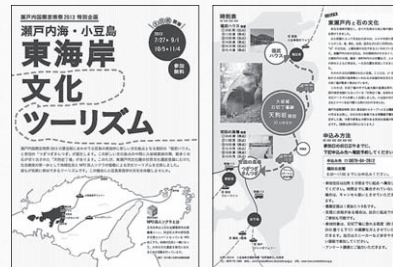
もう一つの目的は地域住民に対して、地域の文化財に目を向けてもらい、住民たちに地域の魅力を再発見してもらうことで



作業の様子（左：金属探知機製作、右：浜辺での宝探し）



左：浜辺での清掃活動、右：参加者の集合写真



東海岸文化ツーリズムパンフレット（左：表、右：裏）



SOCRAHの活動（左：ガイドを行う大学院生、右：シンポジウムでのポスター発表）

ある。そのため、本企画は住民の協力は必要不可欠である。ここで、マイクロバスは地元住民にボランティアで運転してもらい、SOCRAHのスタッフが天狗岩丁場に常駐し来訪者の案内をするという方法で行った。

筆者は、研究対象になる文化財はその地域にある歴史事実や文化現象と結びつけられて初めて価値を持つものであると考えている。その意味で今回の企画は、住民に対する地元文化財への興味の取っ掛かりとしての効果があつたと感じている。また、小豆島町で行われた石のシンポジウムで、実施したアンケートの集計結果を公表し、住民とともに天狗岩丁場の魅力を発信した。

3. SOCRAHが同志社大学・小豆島町や地元住民と目指す地域活性化

ツーリズムを進めていく中で、現段階では運転手とガイドの両立は難しいと感じた。それは地元の文化財をガイドするための講習会を十分に行えなかったことが原因であるが、ツアーを実施する中で、初期は、ガイド業務はSOCRAHスタッフに任せきりであったボランティア運転手も徐々に参加してくれるように変化していった。このようにSOCRAHが起こした小さな火種を絶やさず、徐々に大きくしていく地道な活動を行っていき、最終的には地域住民が地域文化の価値を客体を通じて再評価し、それを自らの手で活用できるサステイナブルな社会資源化が目標である。

そのためには、地域に産業が少ないために、全体的に若い世代が少なくなっている現状は楽観視できない。今後を担う若い世代に地域文化の重要性を認知してもらい、自分たちの地域の魅力に誇りを持ち、盛り上げるきっかけを作ることができるような事業も重要である。

その一つの仕掛けとして、2013年11月23日（土）に小学生を対象にした、親子で参加する『君も今日から考古学者！金属探知機を作って宝探し』企画を行った。この企画は、小学生とその親に簡単な金属探知機を製作してもらい、それを使って国指定史跡である天狗岩磯丁場の浜辺に埋めた探知機に反応する遺物に見立てた金属を埋めておき探してもらうという企画である。定員15人のなか、14人の小学生が参加し、親子共々楽しんでくれたようで、文化財や考古学にも興味を持ってくれた。

子供たちが多くいた。最後に磯丁場の清掃を行い、史跡の大切さを、清掃をしながら感じてもらえたと思う。

4. SOCRAHの今後の活動

SOCRAHの活動の主役はあくまで地域住民であり、文化財を活用するのは地域住民である。地域住民と学術を繋げる懸け橋であり、その文化財と学術的知識を活用するための方法を提示し、実行していくことがSOCRAHの活動である。これから学と民を繋げ、文化を「地域の知」として活用できる方法を提示していく活動を行っていく予定である。

本文を読んで、大学発の学術と社会を結びつけようとするSOCRAHの活動に興味を持っていただけならば、どうぞご連絡いただけますように。こうした寄稿もまた新しい社会と大学との連携に資することを願っている。

人文社会調査研究支援機構（SOCRAH）
住所：〒612-0012

京都府京都市伏見区深草一ノ坪町41番地

パールハイツイナリ20056号室

E-MAIL: kfuukuhara@socrah.org（代表 福原）

URL: <http://socrah.org>

現在の同志社大学の「看板教授」が誰であるかは敢えて論じないが、1950年代の看板教授は明らかに文学部のオーテス・ケリー（Otis Cary）教授だった。ケリーは北海道の小樽に生まれたアメリカ人で、彼の話す日本語は日本人の話す日本語と変わりがなかった。ケリーと同名の祖父はアーモスト大学で新島襄の2年後輩だった。祖父はその縁で宣教師として来日し、新島の死後同志社で26年間教えた。その息子フランクも宣教師で、フランクの小樽時代にオーテスが生まれた。親たちがもてあますほどの腕白少年だったという。

ケリーは14歳まで日本で教育を受けて帰国、アーモスト大学の3年生だったときに真珠湾攻撃で日米が戦争に突入した。自分の国アメリカと、自分が愛する、生まれた国が戦ったのである。この深刻なジレンマをケリーはついに解決した。日本の軍国主義は壊さなくてはならぬ。それを壊す仕事に参加した上で立て直す仕事も自分がやるのだ、と。

米海軍の日本語学校に入ったケリーは、そこで徹底的な日本語教育を受けた。彼のクラスで日本語を聞く・話す能力のトップはケリー、読む・書く能力のトップはドナルド・キーンだった。

することはもつと大変であった。ケリーはこのようにして、日米の文化の相違を学生に理解させようとした。

教室に入ってくるなり、教卓にどかんと腰を下ろす、ということもまた学生の度肝を抜く行為だった。古い日本では教壇は神聖と考えられていた。ケリーはわざとその逆を行ったのだ。大学では教師と学生は同じ地平に立ち、一緒になって真理の探究に進み、自然体であると彼は信じていたらしい。ケリーは固苦しさを嫌い、自然体を好んだ。ケリーは日本人の物の考え方を支配する上下関係を呪縛の一つと捕えた。彼の主要著作の題名は最後に「よこ糸のない日本」（サイマル出版会、1976）となった。

ケリーはアーモスト館に住み、アーモスト館を国際学生寮として再開した（2008年3月末に閉寮）。50年代、60年代のジャーナリズムは日本語でずばずば意見を述べてくれるケリーを頼りにした。ケリーは寮生たちに深い影響を与えた。その影響は、熊本洋学校のジェインズ（熊本バンドの産みの親）、札幌農学校のクラーク（札幌バンドの産みの親）に匹敵するであろう。長い封建時代が終わりを告げた明治の初期と、敗戦で日本の軍国主義が終わりを告げた時期とは共通する。それは価値観が180度変わった危機的な特別の時だった。

ケリーによって育てられた人々の中から国際的な場面で活躍する者が続出したことは偶然ではない。学者となってアメリカや日本の大学の教壇に立つ人が数人現れた。日本の指導的な新聞三紙にも、ケリーが育てた記者が活躍したし、いま現に活躍しつつある。

た。ケリーとキーンはこうして親友になった。

米海軍の情報士官としてケリーはアリユンシャンやサイパン作戦に従軍したのち、ハワイの捕虜収容所で日本人捕虜の世話をするようになる。日本では敵の捕虜になることを生涯の恥として教育されていた捕虜たちを、その呪縛から解放することがケリーの仕事だった。捕虜の心理は逆方向にも働いた。日本人としてのナシヨナリティックな意識は簡単に消えなかった。ケリーは心ある捕虜たちと、戦後日本の立て直しについて論じた。

ケリーは戦後の1947年秋、母校アーモスト大学から、理事会・教授会・学生会・校友会を代表して同志社に派遣されてきた。まだ26歳のハンサムで颯爽とした先生だった。旧制同志社大学予科の14クラスを毎日のように教えてまわった。教材はボードにチョークで描いたマンガで、ケリーは英語で質問を受け付けた後、「Is it funny?」（面白いですか？）と学生に聞く。「イエス」と答えると、「ホワイ?」とくる。苦し紛れに「ノー」と答えると「ホワイ・ノット?」とくる。そのマンガの面白さを英語で説明することは大変だが、なぜ面白くないかを説明す

ケリーはハワイにおける捕虜収容所での体験を、帰還後新聞記者として活躍した人の助けを借りて『日本の若い者』（日比谷出版社、1950）として出版した。この本には戦後の同志社大学での体験も含まれている。「若い者」という言葉は、ケリーが尊敬する連合艦隊司令長官山本五十六の使った言葉からきている。（ケリーの母の伯父ニューエルは新潟県長岡で宣教師だったところ、五十六少年を日曜学校で教えた、という因縁がある。）このたび、その本が『真珠湾収容所の捕虜たち』という表題のもとに、ちくま学芸文庫として復刻された。青年ケリーの若々しいエネルギーと、理想に向って邁進する姿は現在の若い者にも靈感を与えることと確信する。



『真珠湾収容所の捕虜たち』表紙
筑摩書房 1,470円（税込）



若かりし頃の奥田スカーリ先生（1921-2006）
同志社大学名誉教授・同志社アーモスト館館長

同志社女子大学新島八重研究会の 活動を振り返って

女子大学表象文化学部教授
新島八重研究会座長

吉海直人
よしかいなおと

【研究会の立ち上げ】

2013年の同志社は、「八重の桜」で明け暮れた年だった。校祖新島襄夫人である八重が、NHK大河ドラマの主人公に抜擢されたからである。それに先立ち、同志社では「八重桜プロジェクト」が立ち上げられた。女子大学では、独自に「新島八重研究会」を立ち上げた。メンバーは私を座長として、小山重太郎先生あまのたろうの教員5人、学部学科を超えての人選である。これを総務部広報課の職員が全面的にバックアップしてくれた。

ことの起こりは2011年6月のNHKの大河ドラマ予告報道であった。それが大きな波紋を呼び、水面下でいろいろな模索が行われた。一昨



新島八重研究会

年の手帳を見ると、11月16日（水）に第1回の研究会会合があったことが記されていた。それ以前にも打ち合わせなどは数回行われたが、そこで正式に発足したことになる。

【具体的な研究活動】

研究会とはいっても、定期的に集まって研究発表や輪読などを行ったわけではない。メンバーが2校地に別れているので、全員が集まることは容易ではなかったからである。取りあえずは、八重について正しく認識してもらうための啓蒙活動が目標であった。とはいえ当時の研究会のメンバーでさえ、八重のことを正しく語れる自信など誰にもなかった。それが正直なところである。ということで、まずはメンバー内で八重について自主的に勉強することから出発した。

もちろん新しく八重の知識を蓄積するには、かなりの時間と手間を要する。そのためできるだけ自分の専門を活かせる道を模索することになった。NHKの放送は2013年からなので、後は時間との戦いということになる。幸い補正予算が付けられたので、2月に加賀学長を団長として会津若松視察を行っ

【冊子の発行】

2012年度になると、より具体的な動きとなった。メンバーの中では、私が一歩だけ先を進んでいた。たまたま所蔵していた八重の懐古談を『同志社談叢』20号に紹介していたからである。そのため、座長に指名されたのだろう。だから率先して簡単な八重の伝記をまとめることにした。改訂に改訂を重ねながら、どうにか形になったものを「新島八重の生涯」という小冊子に仕上げた。当初は学内向けのつもりだったが、まだ類書が出回っていない時期だったので、かなりの部数が外部でも配布された。これが啓蒙活動の第一弾となった。

それとは別に、メンバーは各自の専門的な視点から、八重にまつわるコラムの執筆を行った。私は専門の百人一首から切り込んでみた。先の伝記と集まったコラムを核として、それに助っ人の清水久美子・小崎眞先生こさきまことから特別寄稿をいただき、さらに関係写真や「新島八重ゆかりの地」などを加えて、2012年10月には『同志社の母 新島八重』という瀟洒な本が完成した。内容的には500円の定価を付けて販売しても売れそうなお本であるが、予算の裏付けがあったので、気前よく無料で配布することになった。これが啓蒙活動の第二弾である。



学芸員の方の説明を受けながら
鶴ヶ城を見学。



会津若松市長を表敬訪問。



若松城天守閣博物館からのご来訪。



福島県立葵高等学校が所蔵されている
八重の書「美德以爲飾」の前で。



『同志社の母 新島八重』

【講演など】

その頃になると、八重をテーマにした講演の依頼や、新聞社などからの問い合わせが広報課に寄せられるようになってきた。これも啓蒙活動の一環であるので、可能な限り真摯に対応している。同志社女子大学の中でも、毎年恒例の「同志社女子大学の集い」もホームカミングデーも八重一色になっていく。それは史料室の講演会や今出川講座にまで広がりを見せ、また同窓会の支部会からも、ひっきりなしに八重の講演依頼が舞い込んできく。

幸い一年間の時間的余裕があったお陰で、メンバーは自分なりのテーマにそって、コラムや講演依頼に応えられるだけのものを貯えていた。最初は私一人でかなりの講演をこなさざるをえなかったが、一年後には各自が分担して、かなりの数をこなせるようにまどなった。そういった研究会の活動は、同志社女子大学のサイトに逐次掲載されている。「同志社の母」刊行後もコラムの執筆は続行され、適宜サイトに掲載されている。私のコラムだけでもいつしか25を超えた。

また遊び心から八重検定の話が持ち上がり、「八重クイズ」という形で毎月10問ずつサイトに掲載されることになった。すぐに100問に到達したので、それを冊子にまとめようということになり、2013年11月に小冊子が刊行されて



『Quiz de Yaye 100』

いる。

【総括】

以上のように新島八重研究会は、短期間で予想を上回る成果をあげているといえる。もう少しだけ活躍の場が残されているが、八重に向けての取り組みはそろそろ一区切りついているところまで来ている。八重は同志社女子大学創設期の重要人物ということが明らかになったので、「八重の桜」の放映が終了した後も、きちんとした形で女子大学の歴史に組み込まれ、これからの女子学生の人生の指針として活用されるはずである。

「八重の桜」によつて、同志社のことは全国的に知れ渡った。しかし喜んでばかりもいられない。「八重の桜」は同志社の教職員に向けてのメッセージでもあると思うからだ。校祖新島襄がどんな思いで同志社を設立し、大学設立の志なかばで亡くなっていたのか、あらためて問い直すいい機会であった。新島八重研究会で啓蒙活動を行ってきた私だが、今突き付けられているのは、同志社女子大学の教員としてどうあるべきかという厳しい問いである。

同志社
クローズ・アップ同志社中学校「大学・社会人へつながる学び」
に関するプロジェクト

中学校・高等学校職員 古城こじょう 郷あきむら

取り組みの発足にあたって

同志社中学校では、生徒一人ひとりが将来、大学で学ぶために、また社会人として働くために求められる力を、中学生時代から育んでいくことが重要だと考え、現在、「大学・社会人へつながる学び」をテーマとした教育プログラムの充実を、検討・実施しています。

低迷する経済状況のなかで伸張する公立志向など、少子化傾向とともに厳しさを増す生徒募集環境において、授業や教科にとどまらないこういった学びの機会を開発・提供することは、「私学としての魅力づくり」としても有効で、すでに関東など先進的な地域では、さまざまな事例とともに注目されています。本校ではこれまで、中学生段階での研究室訪問（同大・京大など）による学問研究を知るプロジェクトや、グローバル時代に伴う中学生の国際交流の新たな取り組みを実践してきました。そこに昨年度から新たに、「企業や社会人とともに協同で取り組み、『働く現場』の『ホンモノ』にふれる」経験の創出に乗り出し、いくつかの実践事例を得ています。

プロジェクトの発掘

はじめに、企業訪問・会社見学、職業講話、産学協同商品開発などについてプロジェクトの可能性を探り、中学生との協同にどれだけの関心と期待が寄せられているかといった実状を把握する目的で、アンケートを実施。さまざまな分野で活躍されている在校生の保護者および卒業生を対象とすることで、多数の協力可能な回答を得ました。（アンケートは継続中。回答を得た中から段階的に実施に移りはじめています。）

プロジェクトを経験して得られているもの

すでに行われたプロジェクトは、いずれも参加者を校内への公募で告知し、結果、異学年の生徒が混じって実施されました。課題を議論することも、現状理解を共有する場面も、アイデアや提案をまとめて方向性を定めることも、あらゆる面で自ら意見する力、他者の価値観への尊重や、チームとして調整する力が求められるなかで、学年を越えた折衝や協力を通して「チームを機能させる力」を磨く経験となっています。また、自分たちの考案したものを会社の方々に対してプレゼンし、評価を受け、さらに練り直し、実際に自らの手で実践に移し、最終的

に報告するといった、仕事しながらのプロセスを体験することで、将来の研究や仕事に向けての社会人基礎力を醸成していくものとなっています。

実践事例報告 (1)

「八幡前」駅活性化プロジェクト
 本校最寄り駅の一つである叡山電車「八幡前」駅の活性化をテーマに、社会企業家を支援するアショカ・ジャパンのサポートを得ながら、本校有志の生徒10名ほどが約3カ月にわたり取り組みました。企業担当者との現地フィールドワークやリサーチをもとに課題を抽出。チームで検討を重ねる中で、駅そのものの改修に相当する長期的な解決提案と、短期的な解決提案を作成し、企業担当者へプレゼンテーションを行い、実際に「駅の手すり塗装」と「壁新聞の発行」を実現（京都新聞とKBS京都でニュースとして取り上げられました）。終業式で全校生徒の前に活動報告をプレゼンテーションし、最終的には叡山電車の社内で社長ほか十数名の社員の方々に對して報告と今後も継続検討する長期提案を行いました。

本校最寄り駅の一つである叡山電車「八幡前」駅の活性化をテーマに、社会企業家を支援するアショカ・ジャパンのサポートを得ながら、本校有志の生徒10名ほどが約3カ月にわたり取り組みました。企業担当者との現地フィールドワークやリサーチをもとに課題を抽出。チームで検討を重ねる中で、駅そのものの改修に相当する長期的な解決提案と、短期的な解決提案を作成し、企業担当者へプレゼンテーションを行い、実際に「駅の手すり塗装」と「壁新聞の発行」を実現（京都新聞とKBS京都でニュースとして取り上げられました）。終業式で全校生徒の前に活動報告をプレゼンテーションし、最終的には叡山電車の社内で社長ほか十数名の社員の方々に對して報告と今後も継続検討する長期提案を行いました。



実践事例報告 (2)

秀和株式会社（がま口専門店AYANOKOJI）との産学協同「会津木綿をつかった八重さんグッズ商品企画」プロジェクト
 東北復興支援として会津木綿を使用した「がま口」商品を開発しようとしていた企業と、会津出身の新島八重（NHK大河ドラマ「八重の桜」主人公）とゆかりのある本校生徒とがコラボレーションして商品企画に取り組みました。企業と商品を知るところからスタートし、工房や店舗の見学も実施。デザインイラスト画に細部の解説や使用イメージなどを各自で制作し、お互いに発表や企画についての意見交換をしました。企業の商品企画部で検討され、サンプルとして作られるステップに進むものとそうでないものの違いは、デザインだけでなく、販売対象や価格・サイズ・耐久性など総合的な見地が必要なることを学んでいきました。京都高島屋で商品は販売され（京都新聞記事2013.5.28を参照）、インターネットショップでも再販し好評でした（現在も継続中）。その後、継続して各自のオリジナル商品企画も行い、今後の商品化も検討されています。



女子中高の国際交流プログラム

同志社
 クローズ・アップ

同志社において、今や国際主義はその教育を支える大きな柱の一つとなっています。本校においても、毎年さまざまな国際交流プログラムを実施し、本校の教育を語る上で、欠くことのできない特色となっています。今回はその中から、いくつかのプログラムについて、紹介させていただきます。

1. イギリス語学研修

まずご紹介するのは、高校2年生・3年生を対象としたイギリス語学研修です。定員は約30名で、イギリスのコッツウォルズ地方にあるのどかな町、モーパーンで、8月上旬の約2週間、現地家庭でのホームステイを体験しながら、英語力の向上を図るというものです。

午前中は、参加生徒をレベル別に4クラスに分け、有資格者による英語の集中レッスンを受けます。各クラスには、イギリス人教師に加えて、イギリス人の学生アシスタントがさらに約3名ずつ入り、本校生徒の学習をサポートしてくれます。また、授業後はさまざまな課外活動を通して、イギリスの文化や習慣に触れる機会が用意されています。そして、授業最終日には、ホストファミリーを招いてのフェ

アウェルパーティーが毎年開かれます。本校生徒が感謝の気持ちを込めて、「同志社花の歌」やダンスを披露したり、日本文化を紹介したりするとともに、前日にホストファミリーと協力して作ったケーキを持ち寄り、見た目や味を競うケーキコンテストも行われます。どのケーキも創意工夫に富み、ホストファミリーと温かみのあるケーキばかりです。

さらに、日本への帰国前日には、ロンドン観光を行っています。ギリギリまで観光や買い物を楽しむ、両手に荷物をはたき、集合時間寸前に駆け込んで



イギリス語学研修 英語授業の様子



イギリス語学研修 ケーキコンテスト作品

女子中学校・高等学校教諭
 総務部副主任 国際交流担当

市川良大
 いちかわりょうた

くる姿は毎年恒例です。

2. オーストラリア語学研修

次にご紹介するのは、中学2年生・3年生を対象にしたオーストラリア語学研修です。こちらの定員は約25名で、7月下旬から8月上旬の12日間、シドニー郊外にあるキリスト教主義の学校に通いながら、現地家庭でのホームステイを経験します。シドニーは言わずと知れたオーストラリアを代表する都市で、教育水準も高く、留学生の満足度も非常に高い都市として知られています。本校生徒は、午前中は有資格者による英語での集中レッスンを受け、午後は、通常授業への参加や、日本語選択の生徒との交流、大学見学、小学校訪問などのさまざまな課外活動に取り組みます。

オーストラリアでの語学研修の特徴は、本校生徒一人ひとりにバディと呼ばれる現地校の生徒がつくシステムです。最初はなかなか思うようにコミュニケーションをとることができず、戸惑いを隠せなかったり、自信を失いかけてしまったりする生徒も見られますが、徐々にお互いに工夫をしながら親交を深め、中には帰国後も連絡を取り合っている生徒もいるようです。

また、他民族国家でのホームステイらしく、ホストファミリーもインド系、中国系、南米系、東南アジア系と多種多様です。英語に加え、それぞれのホストファミリーの母国の文化が感じられる家庭でのホームステイは、生徒にとっても刺激的であり、国際的視野を広げるよい機会となっているようです。

3. 今後に向けて

これら二つの本校独自のプログラムに加え、2014年度か

らは、「アメリカの名門女子大学であるスミス大学で行われる「女子グローバル人材養成プログラム」に、本校からも生徒を派遣することに決定しました。このプログラムは、関西の女子校に通う生徒を対象とし、約2週間スミス大学で寮生活を送りながら、英語でのディスカッションやプレゼンテーションを通して、女性としてのリーダーシップを育てるというものです。

以上のように、本校では年間を通じてさまざまな国際交流プログラムを実施しておりますが、プログラムへの参加が、参加生徒にとつて、英語に関しても、物事について幅広く且つ深く考えるきっかけとなっているようです。そしてそれは、学習面に限らず、学校生活全体のモチベーションの向上につながり、プログラム終了後の学校生活に一層の充実をもたらしています。今後も、国際交流プログラムを通して、より多くの生徒の成長に寄与できるよう、プログラムの改善、また、新たな国際交流プログラムの開発に取り組んでまいりたいと考えております。



オーストラリア語学研修 小学校訪問



オーストラリア語学研修
オペラハウスをバックに集合写真